

児童生徒の問題行動事例にみる指導方法の分析

— 学生の授業レポートを中心に —

深 谷 潤

Analysis of Guidance Methods for Pupils' Problems

Jun Fukaya

はじめに

2004年度生活指導論（進路指導を含む）の授業において、学生204名（教職143、児童教育学科59+教職2の2クラス）を対象にレポートを課した。課題の内容は、児童生徒の問題行動について、実際に自ら経験し、見聞きした事例、もしくは、自分で想定した例のうち、いずれかを自由に選択し、問題行動例、教師の対応、考察の3点をA4用紙1～2枚程度にまとめるものである。ほとんどの学生が実際にあった例を扱った。あらかじめ、レポートは学生の名前を伏せ、選定した上で事例集として公開することをアナウンスし、問題行動の事例は匿名で記述する旨、注意を促した。さらに関係者や学生本人に不都合等生じる可能性も考え、公開を希望しない学生は、事前に申し出るよう指示した。事例集は、自分で想定した例が極めて少ないことなどから、すべて実際に自ら経験し、または見聞きした事例で統一した。担当した2クラスは、中学・高校の免許取得を希望する全学対象の学生と小学校の免許取得希望の児童教育学科の学生に大きく分かれていたが、両クラスに対して、問題行動の例は、児童と生徒どちらでも構わないことにした。結果的に中学生の事例が比較的多くなったが、小学生3件、中学生4件、高校生2件の9件の事例を選定し、事例集を作成した。

1. 目的と方法

本稿の目的は、授業ですでに児童生徒理解の意味や方法、さらに指導方法について学んだ学生が、実際に経験した問題行動をどのように捉え、当時の教師の対応をどのよう

に分析しているかを明らかにすることである。そのことによって、実際の指導とあるべき指導のギャップをどの程度自覚しているかがわかる。また、授業で理解した内容がレポート作成の過程でどのように活用されているのかが明らかにされるため、今後の授業方法や内容の改善に役立つ。ここでは、事例集にある9例すべてを対象とするには、制約があるので、小学生・中学生・高校生から各1例ずつとりあげる。事例に関しては、できるだけ正確を期するため、学生のレポートの該当部分をそのまま掲載する。対応や考察については、特に教師の指導の箇所を中心にまとめることにする。

考察の方法として、まずレポートに記述されている事例を紹介する。次に教師の対応に焦点を当て、その指導とそれに対する学生の考察を説明する。そして、授業内容と照らし合わせ、学生が授業での重要点を把握した上で指導のあり方を考察しているかどうかを検討する。

2. 問題行動の実際例

2.1 小学2年男子のいじめ

[例]

小学校2年生のK君はある日の休み時間中、教室の後ろのほうに集まって騒いでいるクラスメイトたちに気がついた。何かおもしろいことでもあるのだろうかと胸を躍らせ彼も群がる友人たちの隙間に潜り込んでその輪の中へ加わって見たのだが、どうやら輪の中心では当時ガキ大将としてその名を学級どころか学年全体にまで轟かせていたJ君がS君と一緒に油性マジックでN君の顔に落書きをしているらしかった。そこで幼少期より正義感の強かったK君はどうにか人ごみを掻き分けながら輪の中心までたどり着くとJ君とS君に向かって叫んだ。「やめろよ！先生に怒られるぞ！！」・・・しかし、J君もS君もそんなK君の声に耳を傾けることなくN君への落書きを続ける。周りを取り囲む子どもたちの中にはK君のようにJ君とS君を批判する子もいれば、彼らの落書きをはやし立てるような声を上げる子も、黙って見ている子どもたちもいる。最も単純にこの教室における現状を表現するのならば、この時点ではJ君、S君、N君とK君の4人を中に入れてその周りを他の多くの子どもたちが囲っていたのである。そして、半ベソをかいてうつむいているN君の顔にある落書きを見る限り、彼がいじめの対象になっていることは誰が見ても明らかであった。教室内のざわめきが一向に静まる陰りも見せないままチャイムが鳴り、このクラス担任が上記の様子を目撃することとなる。

このレポートでは、教師の対応が次の3つに大きく分けて記述されている。①騒ぎの中心となった児童4人(J,S,N,K)を職員室に呼ぶ。②騒ぎの成り行きを4人から聞く。③問題解決へむけて話し合う。

この中で興味深い点は、②や③中で、教師の態度が急に变化している箇所である。教師は、最初「やさしい口調」でKに落書きをしていないかどうかを問いただしている。いじめの首謀者JとSがKを巻き添えにするためにウソを言うのだが、教師は容易にだまされてしまい、Kもいじめの実行者とされてしまうのである。その理由は、いじめられたNが目前にいるJとSへの恐怖感から、Kにも落書きされた、とこれもまたウソを言うってしまうからである。教師はJとS、そしてNのウソに二重にだまされて正しいことを言っているKをいじめの実行犯にしてしまった。Kも教師の高圧的な態度(「Nがお前にも落書きされたと言っているぞ!書いたんだろ!正直に言え!」)に負けて「やりました」とこれもウソを言うってしまう。教師は子どもたち4人全員のウソを見抜けぬまま「問題解決」をしてしまった。

学生の考察によると、教師の視野の狭さが厳しく指摘されている「彼(教師)は事件の当事者であるJ,S,N,Kの4人の児童たちにしか話を聞いていない。」さらに、児童の心理の理解においても、「4人の児童の誰にもウソをつく可能性が備わっている」ことを見落としていることを指摘している。そのためにも、「該当者以外の子どもたちからも話を聴くべきであった」と分析している。さらに教師のこのような誤った指導が、いじめる側のウソを助長し、いじめられる側の不安を増し、正義感をもって行動した児童に消すことのできない不信感を与えてしまったと結論付けている。

授業では、集団指導の内容において、「集団の教育力」について触れた。教室内で生じた問題行動を解決する際、当事者だけではなく、その周りにいたもの、傍観者に注目し、彼ら彼女らの意見を聴く必要性を強調した。学生のレポートは、この点を踏まえて教師の指導法を批判し、問題解決の方向性を示していると言える。

2.2 中学2年女子のいじめ・不登校

[例]

中学二年の女子生徒Hさんは、いじめを受けたことが原因で登校拒否をしていた。いじめの内容は、Hさんの机や下駄箱に、「学校へ来るな」「ばか、死ぬ」などと書かれた紙が入られるいやがらせだった。それは数回にわたって行なわれた。しかし、学級活動の時間の話し合い、保護者の話し合いが開かれるうちにいつの間に

か止んだ。結局いやがらせの犯人が誰なのかは分からないままだったが、Hさんは再び以前の通り登校するようになった。

教師の主な対応は、クラス全員に対して行なった次の3つである。①話し合いの時間を設けた。②手紙をコピーして生徒全員に配布した。③作文を提出させた。さらに、保護者らと呼び、話し合いをした等である。レポートでは、生徒(H)の自作自演ではないか、と当事のうわさがあったことに注目し、その根拠を彼女の家庭環境から導き出している。Hは、裕福な家庭で甘やかされて育った。金銭で何でも手に入ることに慣れてしまったが、学校で「自分が目立つための才能(運動ができる、面白い話ができる、勉強ができる、など)」は手に入れられなかった。そこで自作自演に及んだのではないか、と言うものだ。このレポートで重要な点は、自作自演を証明することではなく、教師が行なった指導について、いくつか問題点を示していることである。

この教師は、おそらく生徒Hの家庭環境をほとんど考慮に入れず、クラスの中の犯人探しに終始している。話し合いの時間に、「犯人はだいたい分かっている」と感情的にクラス全体を叱るような口調で言ったことは問題であると指摘している。この言葉は、いじめに関与していない多くの生徒たちに、強い不安感を植え付け、常に「自分が疑われているかもしれない」思いを与えている。さらに、教師は生徒全員に手紙のコピーを配布した。このことは、何の効果も無かっただけでなく、「お前の筆跡は分かっている」といった行為であり、「生徒たちに不快な思いをさせただけ」であったと言う。

授業では、児童生徒理解の第一歩として、家庭環境も含めた情報収集の大切さを強調した。特に、親子関係を軸にした家庭での人間関係を可能な限り知っておくことは、問題行動の直接的な原因の把握以前に抑えておくべきであると説明した。教師の指導は、児童生徒理解が充分なされて初めて効果をもたらす。生徒を疑い、犯人扱いするような指導は、レポートにあるように、ただ不安感と不快感を与えるにすぎず、逆効果である。学生は、児童生徒理解の基本的作業の重要性を踏まえた上で、教師の指導の在り方の問題点を指摘することができたと言える。

2.3 高校3年女子の保健室登校

[例]

頭もよく真面目で明るかったK子が、高校3年時に進級して少し経った頃から、体調不良を訴えはじめ、それ以後時々高校を休んだり、遅刻したりしてくるよう

なる。次第に身体にも異常が出始め、髪の毛が抜け始めたりするようになる。それを気にしてか、K子は教室に入るのが苦痛になり保健室で勉強したり、テストを受けたりすることが多くなった。

教師の対応は、① K子本人との面談 ② K子の友人からの情報収集 ③ K子への再面談・指導 ④ 養護教諭からの情報収集 ⑤ K子への励まし ⑥ 依頼（K子の友人、養護教諭、K子の母親） ⑦ K子の母親への助言などである。また、本人だけではなく、友人や養護教諭からも情報収集した上で、依頼や助言などを行なっている。このことがK子の状況を改善することに役立っていると記述されている。友人からの情報で明らかになったのは、母親との関係があまりよくなく、受験やテストのストレスが更に拍車をかけたことである。このストレスが、K子の身体的症状や行動に悪影響を与えたと分析されている。レポートでは、教師の対応のまずさも3点指摘されている。まず、母親との面談時期が遅すぎることである。これは、K子の状況改善に時間がかかった原因の一つに挙げられている。詳しい説明はされていないが、電話の声だけではわからないことが面談で伝達される可能性もあることを指摘している。二つ目は、K子への最初の面談で、体調不良の原因を「短刀直入に」問いただした点である。いきなり本題に入るのではなく、じっくり時間をかけて話し合うべきと述べている。三つ目は、かつらをつけることを不安に思うK子に対して、「そんなこと、誰もきにしないから。大丈夫。」と教師の価値観を押し付ける形になったことである。これは、「担任はなにもわかってくれない。」と言う思いをいだけせ、結果的に教師との信頼関係を損なってしまったと言う。

授業では、児童生徒の気持ちをあたかも自分がそうであるかのように感じる「共感的理解」の重要性と、その方法としてじっくり相手の話を聴く「積極的傾聴」について説明した。レポートでは、担任教師と養護教諭を対比させながら、教師側に積極的傾聴のところがけが不足していたと結論づけている。問題行動の解決には、多くの人たちと協力して行なうことが重要であるとも、授業で説明した。レポートの結論部分に同様の内容が記されている。この事例は、教師の対応が比較的良好な場合であったが、それでもなお、不十分な点を授業内容に照らし合わせ、分析できている。

3. 考察

学生がレポートの中で分析の手段として用いた概念（集団の教育力、共感的理解、積

極的傾聴など）は、学生個人の経験によるものもあるが、その多くは生活指導論の授業の中で触れたものである。ここでは、それらが授業ではどのように説明されていたのかを若干授業内容を振り返ることで確認したい。そして、授業のねらいと学生がその概念をどのように理解できていたのかをレポートの記述内容から分析していきたい。

最初の小学2年男子のいじめの例では、「集団の教育力」が問題行動の分析の柱になっている。集団の教育力を扱った授業では、集団指導の意味と意義がテーマであった。集団の意義において、その機能として集団の教育力があると説明した。集団の教育力は、「児童生徒相互の発達促進的な影響力の総称」であり、4つの機能を含んでいる。

- ① 欲求満足機能：集団の中で基本的な欲求が満たされることにより、児童生徒はより高次の自己実現を指向するようになる。
- ② 発達促進機能：自分とは異なるいろいろな考えに出会ったり、協調したりすることにより、児童生徒は知的、情緒的、社会的発達を遂げる。
- ③ 診断機能：集団の中では社会的技能（社会的スキル）の欠如や自己統制能力の欠如など、発達上の問題が表面化し、把握しやすい。
- ④ 矯正機能：たとえば、自己中心的な子どもは他の子どもたちから批判され行動を変えざるを得ないほど、集団には治療ないし矯正機能が働く。¹

さらに、授業では、集団の教育力が生じる4つの要因を説明した。

- ① 集団内では頻繁なモデリングが生じること。²
- ② 集団内では多様な葛藤が生じ、その解決が要求されること。
- ③ 集団内には集団圧力があり、それが行動の統制を要求すること。
- ④ 集団内での体験は情動を伴うこと。³

これらを通して、集団指導について説明したが、そのねらいは、集団指導の目的を充分理解してもらうことにあった。つまり、集団指導は、個人の発達を促すものであり、主眼は集団ではなく個人である点である。学生のレポートには、集団指導の誤った例が紹介され、教師の対応が批判されている。また、いじめ集団（J,S）と周りを取り囲む生徒たちの2種類の集団が登場している。そこにおいて、教師が、傍観者を含め多くの生徒たちの「集団の教育力」を活かすすべをもたなかった点といじめ集団（J,S）の圧

力が教師の指導も含め最終的にすべてに勝ったことが指摘されている。つまり、授業のねらいに沿って、レポートを読み取るならば、「集団の教育力」がマイナスに働いたこと、そして正義感のあったKが事実をねじまげられ、さらに自らウソをつかざるを得なくなったことにより、「個人の発達」が著しく損なわれたことの2点に言及している。

二つ目の例、中学2年女子のいじめ・不登校では、「家庭環境における親子関係」が分析に重要な役割を示している。授業では、児童生徒理解の領域・内容がテーマであった。集団でも個人でも指導する前に、理解することから出発しなければならないこと。さらに、理解するためには、基本的作業として、本人をとりまく環境条件の中の家庭環境を知っておくことが重要であると説明した。特に、親子関係がうまくいっているかどうかのポイントであることを指摘しておいた。児童生徒理解における領域や内容は非常に多岐に渡っており、ポイントを絞ることが重要となる。本人に関する事柄だけでも14項目、環境条件は4項目あり、教師一人がすべてを把握することは困難である。そこで、基本的な事柄だけでも知っておくことが大切であると判断し、授業では、家庭環境の視点はずさないよう強調した。参考までに、上記の14プラス4項目を挙げておく。⁴

本人に関することがら

- ① 能力（知能、学力、適正）
- ② 性格（情緒の安定性、協調性など）
- ③ 習癖（食事、言語行動、神経性習癖など）
- ④ 問題行動（反社会的、非社会的行動）
- ⑤ 興味・関心・趣味
- ⑥ 身体的状況（健康状態、体格、心身症の問題など）
- ⑦ 学校生活（学業、集団活動、教師への態度など）
- ⑧ 家庭生活（基本的生活習慣、家族に対する態度など）
- ⑨ 交友関係（友人の数など）
- ⑩ 要望・希望（学校への要望、進路先、部活動の目標）
- ⑪ 自己理解と認知的世界（自分自身や外界をどうとらえているか）
- ⑫ 悩み事（身体的、性格上、勉学・進路、対人関係など）
- ⑬ 発達の程度（ことば、知能、運動機能、社会性、自我意識、性意識、職業観など）
- ⑭ 成育歴（成育過程における特記すべきことがら：大病、大けが、転校、家族の

死亡など)

本人をとりまく環境条件

- ① 家庭環境（親、保護者の養育態度、教育的関心、家族構成、人間関係、生活態度等）
- ② 所属するクラブや部（クラブや部内の人間関係や雰囲気）
- ③ 通っている塾（本人の通っている塾の特徴）
- ④ 地域環境（児童生徒の家の周囲の様子：住宅街、商店街、繁華街等、通学路の特徴等）

レポートでは、いじめられたHの「自作自演」の可能性を指摘し、甘やかされて育ったHの家庭環境に原因があると分析している。教師の指導は、家庭環境を含めた情報収集の不足と生徒理解を欠き、さらに犯人捜しという偏った方法が生徒の不安、不信感をあおっているとして批判されている。これは、授業で扱った児童生徒理解の領域や理解に基づく指導の在り方の重要性に沿った観点と考えられる。換言すれば、十分な児童生徒理解に基礎付けられた信頼関係が、指導という教育的作用に効果を発揮することの正反対の例を示すレポートと言える。

最後の高校3年女子の保健室登校の例で中心となるのは、「共感的理解」と「積極的傾聴」である。担任教員の情報収集の方法などは、比較的児童生徒理解の領域・内容に関わる「本人を取り巻く環境条件」を踏まえてレポートしており先の例と重なるので、ここでは割愛する。共感的理解と積極的傾聴は、教師カウンセラーの基本的態度の中で説明したものである。ここでは、K.ロジャーズの来談者中心的立場を軸とした態度に沿ったものである。ここでは、カウンセラーである教師が来談者である生徒の自己成長力・自己治癒力を信頼し、来談者をそのままの姿で受容する、すなわち「無条件の肯定的配慮」をもって温かみのある人間関係をもつ（レポートの形成）ことを心がけることが大切であると説明した。その関係において、来談者が感じ、考えているままに理解する「共感的理解」を用いて、来談者の自己理解を促すことが目指されている。また、来談者の話を丹念に聴く（心をもって聴くこと）がカウンセリングの基本的態度であることも説明した。聴く際に、4つの技術を紹介した。⁵

- ① 単純な受容：「はい」「うん、うん」「なるほど」「そうですか」などの受容を伝達する応答形式。
- ② 内容の繰り返し：来談者の発言内容の末尾部分をそのまま繰り返し、受容と傾聴の姿勢を伝える応答形式。
- ③ 感情の反射：来談者の感情表現に焦点をあて、「ウン、とても腹が立ってたまらない」などと感情を反射する応答形式。
- ④ 感情の明確化：来談者の表現した感情をより明確な言葉に表し、深い共感的理解を伝える応答形式。

レポートでは、養護教諭の方が担任教師よりも生徒のことをよく理解していることを明らかにしている。「担任の教師には共感的理解の面があまりなかった。」「養護教諭と担任では職務内容も違うが、(中略)(担任は)積極的傾聴を心がけてみるべきだったと思う。」と記述している。授業のねらいとしては、カウンセリングの技術すべてを紹介することもできないので、学校カウンセリングの理論や技術としてロジャーズの来談者中心の立場は、比較的理解しやすく実践向きであると判断し、紹介した。レポートの内容では、来談者中心のカウンセリングの重要性や実践場面での展開が具体的にイメージされており、授業のねらいは、一通り学生に伝達されていると考えられる。

おわりに

これまでの考察から、授業で学んだ生活指導の方法に関する知識を学生が、問題行動の分析にどの程度役立てているかに関しては、先の3つのレポートは、全体的にうまく活用できていると言える。本来、学生に課したレポートのねらいは、教師の対応と言う視点から問題行動をどこまで分析できたのかを知ることであった。学生の立場から教師の対応を考察することは、指導する側を批判的に分析しがちになり、現に多くのレポートは教師の対応の問題点を指摘している。このレポートのもう一つのねらいは、もし自分が教師であったら、そのときどのように対応するのかを具体的に考える点でもあった。ここで取り上げなかったレポートの中には、自分もおそらく似たような対応しか出来なかったと思う、と感想を述べているものや、教師に対して同情的な立場に立つものもあったが、決して多くはなかった。近い将来、教育現場に立つ学生たちが、この課題を通して教師のあるべき姿と、現実的対応の差異をどのように受け止めればよいのか考える一つの機会になってほしいと思う。

<註>

- 1 江川政成編 『教師養成研究会 教職課程講座7 生徒指導の理論と方法』(改訂版) 学芸図書株式会社 2004年 pp.50-51
- 2 モデリング：他者の行動を見聞きすることで学習がなされ、行動が変容すること
- 3 ibid., p.51
- 4 ibid., pp.41-43
- 5 ibid., p.83

西南学院大学人間科学部児童教育学科